

日本環境協会理事長賞

生き物をだいにしよう

赤坂中学校 阪本 玲歌

私は、肉が好きだ。なのに、今年春、宮崎県で口蹄疫が発生し、沢山の牛が殺処分された。ふと、思った。何十年か後も、果たして、ステーキを食べることが出来るのだろうか？

私達は、通常、家畜として育てられた牛を食べる。人間の手による「家畜」なのだから、自然界とは無関係ではないのか？と改めて思う。しかし、牛を育てるのには、エサとなる牧草や穀物が必要で、牛肉を1キロ作るには、7キロの穀物が必要だと言われている。

牧草や穀物が育つ土を見てみよう。たとえば、ミミズは、土の中を動き回って細い通り道を作り上げ、それで土を耕していく。土と一緒に堆肥や作物の残りかすを食べ、それが腸の中の微生物と混ざって磨り潰され、植物にとって栄養のある糞になって外に出る。死んだミミズについては、土の中の微生物に分解されて、どろどろになる。体の大半は窒素だから、作物はそのまま肥料として利用する。

土の上では、牧草となるクローバーや穀類が、土から栄養をたっぷりもらい育つ。ミツバチは幼虫のエサにするために花粉を集め、花から花へと飛び回ること、体に付いた花粉が運ばれ受粉させ、花は実をつけ、種を結ぶ。

最近、「ミツバチの「集団崩壊現象」が大きな問題となっ

ている。これは、一説によると、虫が食べると死んでしまう毒成分をつくる性質を組み込んだ遺伝子組み換えトウモロコシのせいだとも言われている。その毒性分が花粉にも含まれているらしいのだ。ミツバチがいなくなったら、作物は出来ず、牧草もなくなってしまうであろう。結果、私の好きなステーキもだ。

全ての生き物は繋がっている。ステーキ1枚を通して、地球上の生き物の生態系、多様性が見えてくる。私達生き物は、その恵みを受けて生きていくのだ。バランスの良い共存こそが、私達人間に食を与え、存続を可能としている。このように考えると、ミミズも愛おしい存在に思えてくる。「生き物をだいにしよう」ということは、私達自身、人間の存続を考えようということだ。

地球上に生息する動植物は、その暮らしては、基本的に植物の生産活動に依存していて、気温、降雨などの気象条件は、植物の生息を大きく左右する。現在、問題となっている地球温暖化だが、その原因となる二酸化炭素は、空気のリサイクルで減らすことができる。まずは、そういった小さな事から始めるべきで。

参考にしたもの

- ・ミミズ博士と生きている土 谷本雄治著
- ・マグロが減るとカラスが増える？ 小澤祥司著
- ・これからの地球 日高敏隆著
- ・地球のために私ができること 枝廣淳子著